中期朝鮮語の母音調和

大　橋　康　子

0．はじめに

中期朝鮮語とは普通高麗王朝の成立した10世紀から、慶長の役(壬辰の乱)の起こった16世紀末頃まで、約7世紀にわたる朝鮮語を指す。この間に15世紀の中頃、ハングルと呼ばれる朝鮮固有の表音文字が創製されたのは周知の事実である。これによって、それまで瀧気にしかみることのできなかった朝鮮語を、それ以後はハングルで表記された資料を通してはっきりとみることができるようになった。

この小論では、中期朝鮮語、なかでもハングル創製直後の15世紀の朝鮮語を中心にその母音調和現象について考えてみたい。すでに何人かの優れた朝鮮語学者達によってなされた研究を土台に、まず第1節では15世紀の母音体系と母音調和を概観し、第2節では母音調和の具体例を提示してそれについて考察する。第3節では15世紀以上に起こったとされる朝鮮語の母音推移と母音調和の関係について述べ、第4節では母音調和の崩壊と関連して中性母音について考えてみたいと思う。

1．15世紀朝鮮語の母音体系と母音調和

1．1．母音体系

15世紀の朝鮮語には、ㅣ－ㅓㅏㅜㅗ、というハングルで表記される7つの母音があり、それが大体次のような母音体系をなしていたことが知られている。

（表A）

i（ㅣ）	ɨ（－）	u（ㅜ）
	ə（ㅓ）	o（ㅗ）
	a（ㅏ）	ʌ（ㅅ）

このような母音体系は、主に外国語をハングルで表記した資料（e.g. 洪武正韻訳訓、四声通解、伊呂波）や、逆に朝鮮語を外国文字で表記した資料（e.g. 朝鮮館訳語）等を通して確立されたものである。なかでも四声通解の中に出てくるパスパ文字のハングルによる転写は、ハングルの音価を知る上で大きな示唆を与えてくれる。

たとえばパスパ文字のaがハングルのㅏと対応し、oがㅗと、uがㅜと、üがㅠと、iがㅣと対応をみせることから、これらのハングルが現代語と非常に近い音価をもっていたことを知ることができる。またeがㅔ（ㅔは〔i〕＋ㅓ）で転写されて

いることから、ㅓが前舌母音〔e〕ではなく、中舌母音〔ə〕に近い音価をもっていたことを推測できるのである。

朝鮮国内での資料としては、ハングル創製の際、その制字原理をあらわした「訓民正音」解例のなかの中声体系に関する説明が、大きな権威をもつものとして尊重されてきた。ここに於いては、各母音を説明するのに「舌縮、舌小縮、舌不縮、声深、声不深不浅、声浅、口蹙、口張」など独特の用語が用いられており、これを現代の音声学の術語と1対1で対応させるのには、少々問題がある。またこれらの用語の解釈の仕方にも学者によって若干の相違があるようである。

しかしながら、たとえば「口張」母音としてㅏ〔a〕、ㅓ〔ə〕が挙げられ、「口蹙」母音としてはㅗ〔o〕、ㅜ〔u〕が挙げられ、また「舌縮」母音としてㅅ〔ʌ〕、ㅏ〔a〕、ㅗ〔o〕、「舌小縮」母音としてㅡ〔ɨ〕、ㅓ〔ə〕、ㅜ〔u〕、「舌不縮」母音としてㅣ〔i〕が挙げられているのをみるとき、我々は中期朝鮮語の母音には整然とした体系性と対称性が存在していたことを知るのである。この体系性、対称性は、当時の人々の意識のなかにあった母音調和現象とも密接な関連をもっていたものと思われる。

1．2．母音調和

15世紀の朝鮮語の母音調和は、次のような2系列から成るものであった。

1．陽性母音―a（ㅏ）、o（ㅗ）、ʌ（ㅅ）

2．陰性母音―ə（ㅓ）、u（ㅜ）、ɨ（ㅡ）

但し i（ㅣ）は中性母音

陽性母音、陰性母音という名称は従来使用されているものであり、ここでもそれに倣うことにするが、この名称は2つの母音群がもつ音声学的な特質と直接的な関連性をもつものと推測される。

陰性系列の母音は相対的に開口度が小さく、「訓民正音」の説明によれば「舌小縮」であるため、口腔の共鳴腔は狭く、母音の与える聴覚印象は暗い。一方、陽性系列の母音は、相対的に開口度が大きく、「舌縮」であるため口腔の共鳴腔は広く、母音の与える聴覚印象は明るい（泉井久之助・羅鐘浩　1968）。

このような母音の響きによる明暗の差異が、母音の交替による意味の分岐的発達をもたらしたとみられる例があり、朝鮮語のひとつの特徴となっている。

god―(直)／gud―(固)　　barg―(明)／burg―(赤)

mas―(味)／məs―(風趣)　　na(我)／nə(汝)

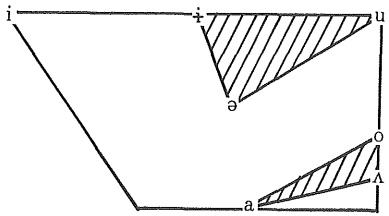
yat―(浅、低)／yət(浅、薄)

ところで中期朝鮮語の母音調和は、このような陽性母音（a、o、ʌ）と陰性母音（ə、u、ɨ）の対立に基づく現象で、ひとつの単語内では陽性母音は陽性母音と、陰性母音は陰性母音と共存し、原則として陰陽両母音の共存は許容しないとい

う規則からなるものであった。ただし中性母音〔ｉ〕は陰陽いずれの母音とも共存しうる。

これを母音図で示すと下記のようになり、

（表Ｂ）



この陽性系列と陰性系列の対立は、一見、音声学的には相対的な高母音と相対的な低母音の対立としてとらえることができるかのように思われる。しかしながら、このような見方に対しては、次のような問題点が提起されている（李基文　1977)。

１．母音調和とは、本質的に母音の同化現象であるから、それぞれの系列の母音は natural class をなすべきであるが、上記の２系列の母音を natural class で分けるのは困難である。母音調和とは、本来母音体系という土台の上に織り成されるものであるが、そういう意味に於いてこの母音調和現象は15世紀の朝鮮語の母音体系を反映するものではない。

２．朝鮮語の母音体系は、15世紀以前のある時期（大体14世紀頃と推定される）に大きな変化を被むったが、陰性母音、陽性母音の両系列は、この母音推移が起こる前の後舌母音と非後舌母音の系列とかなりの一致をみせる（第３節を参照)。

３．トルコ語、モンゴル語等アルタイ系の諸言語では、前舌母音と後舌母音の対立を特徴とする口蓋的調和（palatal harmony）がその基本となっている。アルタイ系諸語と朝鮮語との比較研究から、朝鮮語も本来はこのような体系をもっていたものが、やがて高母音と低母音の体系へと変化していったのではないか。

２．母音調和の例とその考察

２．１．　具　体　例

朝鮮語の母音調和は、体言や用言など自立語の語幹内にとどまらず、自立語と付属語、すなわち体言と格助詞、用言語幹と語尾の間にも認められる現象である。以下に中期朝鮮語にあらわれる具体的な例を通して、母音調和現象を概観してみたい。

１．自立語

陽性調和の例

namo（木）　bʌrʌm（風）　hanʌr（天）　onʌr（今日）

marssʌm（言）　sarʌm（人）　narah（国）　gʌrʌči－（教）

陰性調和の例

ərɨm（氷）　gurum（雲）　sɨgur（田舎）　dɨrɨ（野）

gurhəŋ（窪）　čəzəm（初）　həmɨr（咎）　əbəzi（親）

中性調和の例

nima（額）　nirgub（７）　irhum（名前）

２．体言と格助詞

対格　ʌr～rʌr／ɨr～rɨr（～を）

陽性調和の例

marssʌm-ʌr（言）　nam-ʌr（藍）　na-rʌr（我）

norai-rʌr（歌）　mʌzʌm-ʌr（心）　mʌr-ʌr（馬）

陰性調和の例

ərɨm-ɨr（氷）　kɨ-rɨr（彼）　irhum-ɨr（名）

絶対格　ʌn～nʌn／ɨn～nɨn（～は）

陽性調和の例

namg-ʌn 休）　arpʌi-nʌn（前）

陰性調和の例

mɨr-ɨn（水）　duihəi-nɨn（後）

処格　ai／əi（～に、～へ）

陽性調和の例

bʌrʌm-ai（風）　gaz-ai　barʌr-ai（海）

陰性調和の例

bdɨd-əi（意）　yəsɨs-əi（６）　bəb-əi（法）

中性調和の例

girh-əi（道）

属格　ʌi／ɨi（～の）

陽性の調和の例

son-ʌi（客）　mʌzʌm-ʌi（心）　namg-ʌi（木）　dʌr-ʌi（月）

sasʌm-ʌi（鹿）

陰性調和の例

mɨrgyər-ɨi（波）　gumg-ɨi（穴）　nirhɨn-ɨi（70）

bəd-ɨi（柰）　nip-ɨi（葉）

中性調和の例

mit-ɨi（下）　ǰib-ɨi（家）

具格　ʌro／ɨro（～で）

陽性調和の例

ǰah-ʌro（尺）

陰性調和の例

sgum-ɨro（夢）

3．用言語幹と語尾

用言語幹＋副詞形語尾　－a／－ə

陽性調和の例

nʌr-a（飛）　mo-a（集）　dar-a（異）　maǰ-a（合、迎）

ssaho-a（闘）　god-a（直）　gʌdadʌm-a（整）

陰性調和の例

dɨr-ə（聞）　dup-ə（覆）　gud-ə（固）　mər-ə（遠）

中性調和の例

gip-ə（深）　mid-ə（信）　nirg-ə（読）

用言語幹＋名詞形成語尾　－om／－um

陽性調和の例

ar-om（知）　bʌra-om（仰）　ǰoh-om（洋）　guǰiǰ-om（謗）

陰性調和の例

ur-um（哭）　dər-um（除）　dup-um（覆）　gɨur-um（転）

əbs-um（無）　nyət-um（浅）

中性母音の例

sis-um（洗）

用言語幹＋形容詞形成語尾　－gab／－gəb

陽性調和の例

gas-gab-（近）　as-gab-（惜）　dabs-gab-（沓）

nʌs-gab-（賤）　sʌr-gab-（聡）

陰性調和の例

ǰɨr-gəb-（嬉）　sɨm-gəb-（湯淡）　dud-gəb-（厚）

ud-gəb-（屈強）　nyəd-gəb-（浅、薄）

2．2．具体例の考察

まず自立語の語幹内部に於ける母音調和であるが、これは上の若干の例からもみられるように、中期朝鮮語では母音調和規則に違反する例を見出すほうが、むしろ困難である。しかしながら現代語では陽性調和において、第2音節以下の陽性母音ʌ、

oが各々陰性母音ɨ、uに変化したため、母音調和がほとんど感じられなくなってしまった。

例　namo ＞ namu（木）　hanʌr ＞ hanɨr（天）　onʌr ＞ onɨr（今日）
　　marssʌm ＞ marssɨm（言）　gʌrʌči- ＞ gʌrɨči-（教）

これに対して陰性調和は、若干の母音変化がみられるものの、現代に至るまで本質上陰性調和を保っているのは興味ある事実である。

例　ərɨm ＞ ərɨm（氷）　gurum ＞ gurɨm（雲）　sɨgur ＞ sigor（田舎）
　　dɨrɨ ＞ dɨr（野）　gurhəŋ ＞ gurəŋ（窪）　čəzəm ＞ čəɨm（初）
　　həmɨr ＞ həmur（咎）　əbəzi ＞ əbəi（親）

次に体言と格助詞の間にみられる母音調和に関してであるが、これもまた上例のごとく、格助詞の種類（対格、絶対格、処格、属格、具格）を問わず、陽性母音の下では陽性調和が、陰性母音の下では陰性調和が規則的にはたらいて、調和現象を保持していたことがわかる。

ところでこれらの格助詞は、対格（ʌr～rʌr／ɨr～rɨr）においても、絶対格（ʌn～nʌn／ɨn～nɨn）、処格（ai／əi）、属格（ʌi／əi）、具格（ʌro／ɨro）においても、現代語では陽性形が消失し、陰性形に統一されてしまった。ここで注目されるのは、上にも若干の例がみられるごとく、中性母音 i を含む体言につく格助詞は、陽性よりもむしろ陰性形であるという点である。「龍飛御天歌」の統計分析の結果では、このような体言につく対格助詞は 9 対 1 で圧倒的に陰性形が多数を占めているという（泉井久之助、羅鐘浩　1968）。これは、時代が下がるにつれて陽性形の格助詞が消失し、やがて陰性形に統一されてしまうその崩芽とみることができるかもしれない。

上例にみるごとく、用言語幹と語尾の間にも母音調和が行なわれていた。このうち形容詞形成語尾の -gab／-gəb は、現代語では語幹と語尾の区別が困難なほどまでに形態素の融合がすすみ、母音調和の規則に支配されたまま発音と表記が固定しまった例がいくつかみられる。

例　gas-gab- ＞ gaggab-（近）　as-gab- ＞ aggab-（惜）
　　ǰɨr-gəb- ＞ ǰɨrgəb-（嬉）　dud-gəb- ＞ duggəb-（厚）

用言語幹に副詞形語尾（-a／-ə）がつくときも、忠実に母音調和規則が作用していたが、この調和現象は一般に母音調和のほとんど消失してしまった現代においても、比較的よく保たれているのが注目される。

例　nʌr-a ＞ nar-a（飛）　mo-a ＞ mo-a（集）　maǰ-a ＞ maǰ-a（合、迎）
　　dar-a ＞ darr-a（異）　dɨr-ə ＞ dɨr-ə（聞）　dup-ə ＞ dup-ə（覆）
　　gud-ə ＞ gud-ə（固）　gip-ə ＞ gip-ə（深）　mid-ə ＞ mid-ə（信）
　　nirg-ə ＞ irg-ə（読）

さきに中性母音 i を含む体言につく格助詞は、陰性形が圧倒的に多いと述べたが、上の例においても、中性母音 i をもつ用言語幹のあとでは、陰性形の副詞形語尾-ə が支配的である。これは、母音調和が次第に陰性形によって統一され崩壊していく、一連の朝鮮語の音韻変化の特徴をあらわすものと考えられる。

用言語幹に名詞形成語尾（-om／-um）がつく場合も、上例のごとく母音調和が保たれていたが、現代語に至っては語幹が開音節の場合は語尾 -m が付着し、閉音節の場合は結合母音が挿入され、語幹の母音の種類に関係なく -ɨm が付着する。これも一種の陰性形による統一とみなすことができるであろう。

3．母音推移と母音調和

3．1．13世紀の母音体系

1節において中期朝鮮語の母音調和は15世紀の母音体系を反映するものではなく、それ以前、すなわち朝鮮語に母音推移が起る以前の母音体系とかなりの一致をみせる可能性のあることを指摘した。したがって、ここではまずハングル創製より前の13世紀頃の母音体系について考えてみることにする。

13世紀の母音体系は、13世紀に朝鮮に入ってきた蒙古語からの借用語を検討することによって、その姿をかなりの程度まで明らかにすることができる。この資料は15、16世紀にいたってハングルで表記されたものではあるが、13世紀の蒙古語と朝鮮後の音韻体系を示唆してくれるものである。それによれば、両者のあいだには次のような対応がみられるという（李基文　1972）。

	1	2	3	4	5	6	7
蒙古語	a	o	u	e	ö	ü	i
朝鮮語	ㅏ	ㅗ	ㅗ	ㅓ	ㅓ	ㅜ	ㅣ

この表の2と3から13世紀の朝鮮後には o と u に対応する円唇後舌母音がひとつしかなかったことがわかる。15世紀のようにもし〝ㅗ〟が〔o〕であり〝ㅜ〟が、〔u〕であったならば、このような対応はみられないはずだからである。6の対応は、13世紀において〝ㅜ〟が中舌高母音の〔ü〕であったことを推定させてくれる。また15世紀には中舌母音であった〝ㅓ〟が13世紀には〔e〕に近い前舌母音であったことも、この表から知ることができる。

当時の母音体系は蒙古語からの借用語のほかに、12世紀13世紀の朝鮮語の単語や語句を漢字で表記した「鶏林遺事」や「郷薬救急方」等を検討することによって、

大体つぎのようなものであったことが明らかにされた。

（表C）

i（ㅣ）	ü（ㅜ）	u（ㅗ）
e（ㅓ）	ə（ㅡ）	ɔ（ㆍ）
	a（ㅏ）	

この表に表記したハングル（ㅗ、ㅜ、ㅡ、ㅏ …）は、正確には15世紀のㅗ、ㅜ、ㅡ、ㅏ …に対応する13世紀の母音という意味である。

3．2．母音推移

このようにして再構された13世紀の母音体系（表C）を15世紀の母音体系（表A）と比較してみるとき、この間に大きな母音推移が起こったことを知るのである。その時期は13世紀以降15世紀以前で、だいたい14世紀ぐらいのことと推定される。

この母音推移が起こったきっかけは、おそらく前舌母音であった〝ㅓ〟が、中舌方向（〔e〕>〔ə〕に移動してきたことに始まるものと推定される。この〝ㅓ〟の中舌化に影響された〝ㅡ〟が上に押し上げられて、その圧力で〝ㅜ〟が後舌方向に移動したのであろう。〝ㅗ〟は〝ㅜ〟の圧力で下に動き、その影響で〝ㆍ〟がいっそう下方においやられるようになったものと考えられる（李基文　1977）。

このようにして音価を〔ɔ〕から〔ʌ〕へと変化させた〝ㆍ〟は、〔ʌ〕の位置に留まることなく、他の母音と合流することにより消失してしまったことが、その後の資料によって確認されている。

まず非語頭音節においては、〔ʌ〕は一般的にいって〔ɨ〕と合流してしまった。

例　dʌi > dɨi（處）girʌma > girɨma（鞍）　modʌn > modɨn（全）

doǰʌg > doǰɨg（盗賊）　nagʌnʌi > nagɨne（客）

〔ʌ〕>〔ɨ〕の音韻変化の傾向は、第2節においてみた格助詞の中にもみることができる。すなわち、陰性と陽性に分かれて母音調和現象を呈していた対格助詞（ʌr～rʌr／ɨr～rɨr）、絶対格助詞（ʌn～nʌn／ɨn～nɨn）、属格助詞（ʌi／ɨi）等が、次第に陽性形を失ない陰性形で統一されていった背景には、〝ㆍ〟自体の音韻変化が作用していたのである。

語頭音節においては〝ㆍ〟は〔ʌ〕から〔a〕へとその音価を変化させたことが知られている。

例　bʌrʌm > baram（風）　mʌzʌr > maɨr（村）　bʌra- > bara-（仰、願）

gʌrʌči- > garɨči-（教）

このように母音変化を概観してみると、14世紀頃起ったとされる朝鮮語の母音推移は1、2の母音にとどまるものではなく、母音体系全体を揺るがせる大きなできごとであったことを知るのである。そしてこの母音推移が起る前の13世紀の母音体

系（表C）に目を向けるとき、一見相対的高母音（u、ɨ、ə）と相対的低母音、（a、ʌ、o）の対立から成るかと思われた中期朝鮮語の母音調和（表B）が、実はu、ɔ、a／ü、ə、eの対立にさかのぼるものであり、後舌母音対非後舌母音の対立にかなり近いものであったことが明らかになった。これは、後舌母音対前舌母音の相関的対立による口蓋的調和を基本とするアルタイ系諸語と関連づけやすい点においても、注目される現象である。

古代朝鮮語の母音体系は、まだ完全にはその姿が解明されていない。その再構を試みるためには、何よりも古代語の資料の検討に重点が置かれなくてはならないのは事実である。それと同時に、朝鮮語の母音調和現象が15世紀の母音体系より13世紀の母音体系とより良い一致をみせるのを知るとき、おそらくは時代を溯れば溯るほど、母音調和規則が母音体系を忠実に反映していたものと推測される。すなわち、後舌母音と非後舌母音のかなり整然とした体系が浮かび上がってきて、古代朝鮮語の母音体系を解明するのにひとつの手がかりを与えてくれるのではないかと思われる。

4．中性母音

一般に中性母音というと、どの母音とも共起できる特徴をもつものとして、母音調和現象とは無関係だと片付けられてしまう傾向があるようである。しかしながら中性母音は、その発生過程に於いて、また母音調和現象の消失過程に於いて、母音調和と深い係わりをもつものだといわなくてはならない。

蒙古語やツングース系の言語において、中性母音というのは母音調和の2つの系列に各々属する母音が合流することによって生じたものであることが明らかになっている。たとえばツングース系のエベンキ語において、中性母音iは前舌母音*iと後舌母音*ï 及び*ü が合流した結果生じたものであり、蒙古語に於いて、中性母音iは前舌母音*i と後舌母音*ï の合流の結果生じたものである。

しかしながら、同じ中性母音のiといっても、エベンキ語のそれと蒙古語のそれとの間には差異のあることが知られている。たとえばエベンキ語のdilは「頭」を意味する語であり irgi は「尾」を意味する語であるが、前者は常に後舌母音形の接尾辞をとり、後者は常に前舌母音形の接尾辞をとるという。これはdilが本来は*dïl であったため*dïl ＞ dil と変化した後も、後舌母音形の接尾辞をとるという規則を捨てずにいるためであり、irgi は本来*irgi であって前舌母音形の接尾辞をとっていたものと推定される。

一方蒙古語においては、中性母音iのみからなる語幹は一様に前舌母音形の接尾

辞をとるという。これは蒙古語にもかつてはエベンキ語と同じく本来の規則を保っている段階があったのだが、のちにこれを捨て去ったものだという推測を可能にしてくれる。

朝鮮語の中性母音 i の歴史はまだ解明されていないが、アルタイ系諸語との関連において、やはり *i と *ï の合流があったのではないかと考えられる。とすると、朝鮮語に於いても両者が合流したのちに、中性母音 i をもつ語幹が合流以前の性質に基づいて、後舌母音形／非後舌母音形の接尾辞を選択してとっていた段階があったのではないだろうか。

このようにみるとき、朝鮮語の中性母音語幹が、後舌母音形の接尾辞も非後舌母音形の接尾辞も本来自由にとっていたのだとは想像しがたい。たとえば、15世紀に用言語幹 niǰ-（忘）が語尾として -ʌni と -ɨni を自由に選択できたということは、sarʌm（人）という名詞が母音調和の部分的崩壊を反映して絶対格助詞の -ʌn も、-ɨn もとったのと同じ現象だとみることはできないだろうか。

ところで中性母音には中期朝鮮語にみられる i の如き完全中立の母音だけではなく、部分中立とみられる母音もある。第3節に於いて、非語頭音節における ʌ > ɨ という母音変化について述べたが、この ʌ と ɨ の合流は母音 ɨ の部分中立化をもたらした。すなわち ɨ は語頭音節に於いては相変らず陰性母音であったが、非語頭音節では中性母音となったのである。

一方語頭音節に於いては ʌ が a と変化したが、両者の合流は同系列（陽性母音）内の合流であるため、a の部分中立化をもたらすことはなかった。

現代の朝鮮語には、中性母音の i、部分的中性母音の ɨ のほかに、もうひとつ部分的中性母音とみなされる u があると考えられる。これは非語頭音節に於いて o > u の傾向が見られるためである。その結果、たとえば次のような語彙から母音調和が感じられなくなってしまった。

例　namo > namu（木）　sargo > sargu（杏）　noro > noru（獐）
　　ǰʌǰo > ǰaǰu（頻）

以上のように母音の中立化の現象をみていくとき、中性母音の発生はすなわち、母音調和の部分的崩壊過程の糸口を意味するものであることを認識するのである。

母音調和の崩壊を促進する要因としては、この他に形態素に於ける単一化の傾向を挙げることができるであろう。すなわち、ひとつの形態素はひとつの音韻形によってのみ代表させようという傾向である。さきに挙げた格助詞の陰性形による統一もその一例であるが、さらに最近の朝鮮語に例をとるならば、用言語幹が副詞形語尾をとる場合、語幹母音が〔-a-〕である場合に限って陰性形の語尾〔-ə〕が徐々に一般化していく傾向がみられる。

例　ǰab-a > ǰab-ə（取）　ar-a > ar-ə（知）　ap-a > ap-ə（痛）

しかしながら、語幹母音が〔-o-〕である場合には、まだ陽性形の語尾〔-a〕をとる規則が作用しているようである。

例　mo-a（集）　bo-a（見）

《参考文献》

青山秀夫（1976）「朝鮮語の母音調和」（『言語』5巻6号）
泉井久之助・羅鐘浩（1968）「中期朝鮮語の母音調和と母音交替」（『言語研究』52号）
大江孝男（1978）「朝鮮語と日本語」（岩波講座『日本語』12）
金完鎮（1967）「韓国語発達史　音韻史」（『韓国文化史大系　V』）
河野六郎（1955）「朝鮮語」（『世界言語概説下』）
李基文（1968）「母音調和と母音体系」（『李崇寧博士頌寿記念論叢』）
李基文（1972）『国語史概説』
李基文（1977）『国語音韻史』
李崇寧（1961）『中世国語文法』

THE VOWEL HARMONY IN THE MIDDLE KOREAN LANGUAGE

Yasuko OHASHI

This paper discusses the vowel harmony phenomenon in the Middle Korean language. The attention is focused on the 15th century Korean language, when the Hangul, the phonetic script of the Korean language, was first created in its history. Firstly, the vowel system of the 15th century is presented and the possibility is pointed out that the vowel harmony phenomenon does not reflect that vowel system. Secondly, the examples of words that are under the vowel harmony limitations are quoted from the 15th century Korean documents and are commented on. Thirdly, the vowel shift that took place around the 14th century is discussed with respect to the vowel harmony. It is shown that the vowel harmony reflects the vowel system of the 13th century Korean rather than that of the 15th century. Finally, the so-called neutral vowels are discussed in terms of the disappearance of the vowel harmony.